

かさおか

発行所
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66-1311
FAX 66-1314



猛暑の中 力強く咲くひまわり

(8月9日撮影 今月号表紙写真は大会神苑で撮影されたものではありません)

教祖130年祭に向かって

成人目標

おつとめ奉仕人の増員

立教175年
8月号

七月月次祭講話

何が何でも一手一つに

世話人 島村廣義先生



教祖130年祭に向かう心について
お話し下さる島村先生

◎諭達発布前後の流れについて

7月8日付『天理時報』に、教祖130年祭準備会議から、年祭に向けた動きが発表されました。

6月26日、本部員会議の席上で、真柱様から、130年祭に向かつての活動を進めていく上に、秋季大祭に合わせて諭達を発布する旨をご発表になりました。

この諭達を受けて、秋季大祭の翌日、本部員・本部直属教会長など全教の先頭に立って御用をつとめる先達が、一堂に会して、130年祭に向けて、活動の先頭になってつとめることを誓い合う「教祖130年祭

決起の集い」が開催されます。

続いて、年祭活動の意義を徹底するという意味から、11月20日から来年の2月末に掛けて、各直属教会へ本部巡教が実施され、この本部巡教の理を受けて来年5月末に掛けて、直属ごとに部内教会へ一斉巡教を実施するようにと、発表されました。

今日までの教祖年祭活動の進め方の中にあつて、直属教会に対して、部内に一斉巡教をするようにと仰せになったのは、今回、初めてです。

本部巡教で、各直属へその理を流され、その次は、本部から直接、各地域へ出向き、各地域において、よふぼく対象に「地方講習会」が実施されてきましたが、今回は、その前に、直属の責任において、部内教会に、諭達と教祖年祭活動の意義を周知徹底するようにということでした。

その直属巡教が終わった夏以降に、よふぼく対象の講習会を開催する予定です。

そして、今回も、年祭活動は、おたすけを中心に展開していくという基本線を踏まえて、各自の信仰実践に繋がる具体的かつ実践的な内容を検討していると発表されました。

◎「諭達」とは

改めて、「諭達」とは、と申しますと、お道の節目にあつて、真柱様が教内に対して、時旬の理に相応しい信仰実践について教示されるものであると示されています。

要は、今日の私たちにとって、「刻限のおさしづ」

とも申すべき、同様の理を以て受け止めなければならない、大変重要なお言葉であると、私は思案しています。

諭達は、素直に、真つ正直に、丸ごと受け止めて、その思召にお応えするよう懸命に努力しなければならぬと、私は思っています。

◎教祖年祭に向かう一人ひとりの心構え

かつて、110年祭を打ち出された時の真柱様のお言葉が、昨日の様に思い出されますが、「これまで10年を仕切つて十何度つとめてきた教祖の年祭は、言われて立ち上がつて、そして活動し、つとめた年祭が多かつたが、次の年祭をつとめるなら、もう100年祭もつとめたのだから、声が掛からなくても、言われなくても、自主的に動くようであれば、一向に成人は覚束ない。一人ひとりが仕切つて立ち上がる様な年祭活動を、今度はさせていただきます」とのお言葉でした。

100年祭までつとめたのだから、今度はをやにいわゆるまでもなく、自分から求めて、をやに喜びいただきご安心いただけるような成人の実を上げるようにと、一人ひとりの積極的な行動をお促しくださるとともに、一手一つの大切さと、三年千日と仕切つてひながたの道を歩み、その成人の実が、結果として、教会内容の充実のご守護をお見せいただけるよう通ろうと、110年祭のご発表と三年千日仕切つての活動を、真柱様は、諭達ではなく、年頭のおことばでお促しくださいました。

これが、110年祭の活動の始まりでした。
このおことばにより、それぞれの直属・部内教会
においては、教会長・よぶぶく、それぞれの立場で
こころを定めて年祭活動に取り組みました。

◎一手一つになるための「諭達」

このようにして年祭活動が始まりましたが、をや
の思召は一つでも、人それぞれに許された心
の自由があり、それぞれの信仰の上から成人に応じ
た心の納め方・悟り方があるので、時と場合によっ
ては、皆の心がなかなか一つに揃わないことも、得
てしてありがちです。

しかし、教祖年祭活動は、どうでもこうでも、全
教が一手一つに心をつなぎ合せて、教祖の親心にお応
え申さねばならないとの強いご信念から、その年の
10月に「諭達第四号」をご発布くださった——全教
の心をついに揃えるという意味から、諭達を発布さ
れました。

100年祭以降の年祭活動に対する心構えや諭達に込
められた思召・親心を思案するとき、何が何でも、
真柱様のお心に、全教が一手一つに心をつなぎ、教祖
にお喜びいただけるよう、成人への歩みを進めなけ
ればなりません。

◎教祖年祭の意義——つとめの急き込み

教祖年祭の意義は、立教の元一日を温ね、ひなが
たを辿り、さらに、こどもの成人を急き込んで御身
を隠された元一日に返り、親神様が人間世界を創り

給うた元始まりの思召である陽気ぐらしを実践する
ことにある、と教えられます。

教祖年祭の元一日を振り返り、その思召を思案す
ると、それは、おつとめの完成と、それに向かう人々
の心の成人のお急き込みにあるといえます。

◎つとめはたすけのもとだて

ようこそつとめについてきた

これがたすけのもとだてや (六下り目4)

いつもかぐらやてをどりや

すゑではめぐらしたすけする (六下り目5)

と仰せられますが、「世間の嘲笑や迫害の中も心倒
すことなくこのつとめについてきた。このおつ
とめこそが世界一れつをたすけていただく根本のつ
とめである。いつもかぐらやてをどりを心掛けて
通つていさいすれば、必ず珍しいたすけを見せてや
るぞ」とお教えくださっています。

おつとめはたすけの根本の手立てであり、人だす
けのもとだてであるとともに、また、自分自身をも
たすけていただける元なのです。

このつとめは、親神が、紋型ないところから、
人間世界を創めた元初りの珍しい働きを、この
度は、たすけ一条の上に現そうとて、教えられ
たつとめである。即ち、これによつて、この世
は、思召そのままの陽気な世界に立て替つてく
る。(教典第二章)

とご明示くださっています。

おつとめは、私たちの、親神様へのつとめです。

親神様は元の神様・実の神様です。その「元」を立
てるので「もとだて」であり、また、お互いの理が
立つのです。おつとめがたすけのもとだてであると
いう意味はここにあるわけです。

みなそろてはやくつとめをするならば

そばがいさめバ神もいさむる (二 11)

命の源であり、すべてのご守護の源である親神様
の懐に飛び込むのです。

さあく、皆勇んで掛かれ。勇む事に悪い事は無
いで。(明33・10・31)

勇んで掛ければ十分働く (明40・5・17)

と仰せくださり、おつとめをすると、いつしか気が
晴れて心が澄んできます。親神様のをやという理を
頂くから心が澄んでくるのです。

このたすけのもとだてであるつとめの完成とそれ
に向かう人々の心の成人を、教祖は、現身を以てお
急き込みくださいました。

真柱様は、本年春季大祭講話の中で「その日のお
つとめは、形の上からは、決して十分とは申せませ
ん。しかし、教祖が満足気にしておられたというこ
とは、おつとめをつとめる人々の心の真実をお受け
取りくださったということだと思ふ。今日の恵まれ
た環境のもとにある私たち自身が、思召に叶う、お
受け取りいただける心に近付くための手掛かりを、
先に述べた先人達の心の動きの中に温ねると、先ず
は、銘々が立場や状況による違いはあるでしょうが、
信仰的にはしなげればと思ひながら、いろいろな理
由から怠っていることはないか、と顧みることで

しよう。自分は常日頃、どれだけ親神様・教祖を念頭におき、教えを抛り所に考え行動しているだろうかと思える。そして、たとえ一分でも二分でもより教えに基づく考え方・通り方を心掛けることが大切だと思ふ。」とお話しくださっています。

ちば・かんろだいを囲んでつとめられるかぐらづどめの理を体して、今日、私たちは、それぞれの教会においても、月次祭のおつとめもつとめます。

それぞれの教会が、おつとめの道具を揃え、おつとめをつとめる人の手を揃え、さらにはぢば一条に心を揃えて、一手一つに、教祖からお教えいただいた通りに、何欠けることなく、情性に流れず、心陽気に勇んでおつとめをつとめているでしょうか。

このおつとめの理を一人でも多くの世界の人々に写していくこと、広めていくこと、に、をいかけ、おたすけこそが急務と仰せられる私たちよ、ふぶくの使命です。

130年祭活動に向かう時旬の上から、一番、私たちが心しなければならぬふぶくの大事なつとめであると提案します。

◎かぐらづどめの地歌からお教えいただくこと

話は変わりますが、論達を受ける前に、それぞれが、それぞれの立場立場で信仰の元一日・原点に立ち返るといふ上で、皆様方といっしょに、かぐらづどめの地歌からお教えいただく教えの根本をおさらしたいと思ひます。

かぐらづどめの地歌の中に、年祭活動を進めるお

互いが、「よ、ふぶくが、当然、心に納めておらなければならぬ信条、教えの角目・基本」をお教えいただいていると思うからです。

第一節のお歌は、親神様に一条にもたれて祈念しお願いするお歌です。

そのためには、先ず、それぞれ各自が心を入れ替えて、胸の掃除をして、親神様の思召に叶う心になることが肝心であると教えられます。

そこに、親神様のたすけ・御守護が、一身・一家に留まらず、この世が陽気ぐらしに治まる御守護をお見せいただけるようになっていきます。

親神様とは、この世・人間をお創りくだされ、今なお、十全の守護を以て、私共の身体を始め、すべてを御守護くだされている元の神様・実の神様です。

その御守護の理は、これに神名を配して説き分けられ、入信の元一日、誰しもが始めに聞かせられる神様のおはなし、教えの台ともお聞かせいただく、かしまの・かりもののご教理は、この親神様の十全の御守護の理から納得ができ、また、親神様の限りなき御恩が分らせていただけます。

たんくとなに事にてもこのよふわ
神のからだやしんしてみよ (三〇・一三五)

にんけんハみなく神のかしものや
なんとをもふてつこていやるやら (三一)

めへくのみのうちよりのかりものを
しらずにいてハなにもわからん (三二)

とお教えくださっています。

胸の掃除・心を入れ替えとは、それぞれがこれまでの心遣いを教えに基づいて反省し、さんげをするとともに、親神様の思召に添わない心遣いを、「八つのほこり」を基準にして改めることです。

すなわち、胸の掃除・心を入れ替えとは、弛みがちな心を、人をたすける陽気な勇み心に入れ替えることです。

人を救ける心は真の誠一つの理で、救ける理が救かる (おかきさげ)

とお教えくださっています。

第一節のお歌は、親神様の十全の御守護の理、かしまの・かりもの理、八つのほこりの教理が台となつていきます。

それぞれが、しっかり胸の掃除をして、親神様の思召に叶う心になって、ひたすら、親神様にお凭れして祈念し、お願いすることを教えられます。

第二節のお歌は、親神様の思召・仰せを聞いて、しっかり心に納めるということでしょう。

この世の元初りの理話、親神様が元の神・実の神である所以をお聞かせくださっています。

親神様は、この世の始まりに、天と地を象つて、道具を引き寄せ、男・女、夫婦の雛形を定め、人間をお創りくださったこと、このことは、並大抵でない御守護であるばかりでなく、以来、人間は、親神様の御守護のもとに、長い年月を経て、今にいたることを教えられています。

この理が真に納得でき、心に納まれば、ほこりの

心、欲の心は消えていきます。

そして、お歌の最後に「なむてんりわうのみこと」と親神様の神名を唱え、一条ひとすじに親神様にお継り申しあげるので。

第三節のお歌は、親神様のお急き込みである「世界だすけ」、陽気ぐらしの世の実現を目指して、一日も早く御守護いただけるように祈念すると同時に、親神様の思召実現に向かつて、私たちが、ひたすら、その御用にお使いいただきというお誓いのお歌です。

あしきをはらうのは第一節と同じですが、それぞれの胸の掃除の上に、世界中の胸の掃除と仰せられています。

親神様の御用にお使いいただき、その御守護を祈念するのです。

この、御用にお使いいただき、つとめさせていただくのが「よふぼく」です。

よふぼくは、常に胸の掃除をし、心を入れ替えて、世界だすけの親神様の御用にお使いいただくのであり、その中に、つとめの喜びがあるわけです。

かんろだいは、元なるちばの証拠に据えられ、人間の創造と、その成人の理とを現して形造り、人間世界の本元と、その窮りない発展とを意味する。
(教典第二章)

と教られる台です。

したがって、かぐらづとめの芯となる台であるとともに、他面、かんろだいは、「この世が治まる柱」

とも教えられ、また、陽気ぐらしの世の中を「かんろだいい世界」とも仰せられ、親神様の御守護のもとに、私たちが積み上げていく姿を教えられています。よふぼくの究極の使命はここにあると思案します。

世界一れつの人間の心が澄み切ったならば、かんろだいの上にひらばちをのせ、それによって、「じきもつ」をくださいます。人間、15歳定命、その健康と寿命をお約束くださっています。

以上が、掻い摘んで申しあげましたが、かぐらづとめの地歌に教えられる教えの要点です。

◎年祭に向かう心——日々常々の心遣い・通り方

月次祭・大祭のおつとめ、朝夕のおつとめ、また、事情・身上のお願いづとめやお礼づとめなど、おつとめによって鮮やかな御守護を頂戴しますが、それには、何と申しても、日々常々の心遣い・通り方が大切です。

おつとめをつとめる人、それぞれが、日々、親神様に、真実誠の心をつくしはこび、親神様にお働きいただく理をつくるのが大切です。

日々、ひのきしんに励み、真実誠の心をちばにはこぶことが肝心です。

道のためあちらへもこちらへも種を下ろし、道のために尽したなら、何処からでも芽を吹く。

(明30・5・21)

日々運ぶ尽す理を受け取りて日々守護と言う。

と教えられるように、倦まず弛まず日々身に尽くし、心を尽くして、真実を運ぶところに、必ず、御守護をお見せいただけます。
(明26・12・6)

教祖年祭の元一日の思案から、思召は、おつとめの完成と、それに向かう人々の心の成人のお急き込みであると受け止めて、おつとめについて、また、つとめさせていただく私たちの心の拠り所をお話ししましたが、要は、これから、論達を以て思召される130年祭活動に、三年千日を仕切って、どんな中も、教祖ひながた一条ひとすじに、私心を捨てて通り切ろうということです。

ものというものは旬がある。……旬が外れると、種を下ろしても生えるものもあれば、生えんものもある。旬が外れば覚束おぼつかないもの。どんなものでも旬が外れると、一花だけで落ちて了たら、どうもならん。これから一つの理を聞き分け。
(明28・5・12)

と仰せられます。

130年祭活動の三年千日、お打ち出しも目前に迫った今日です。旬を外さず、悔いなくつとめて、教祖にお喜びいただける成人の実を上げたいと思えますが、そのためにも、今、論達のご発布を前にして、それぞれが、ひとつ、それぞれの入信の元一日、信仰の原点に立ち返って、自分の足許を眺め、心を正して、その理を丸ごと受けれる、一つのそりをしっかり作って、秋の大祭を迎えたい、このように思う次第です。
《以上要約》

立教175年 こどもおぢばがえり

おぢばに

弾ける笑顔!

「よろこび いっぱい! さあ ひのきしん」を新テーマに立教175年こどもおぢばがえり(教会本部主催)が7月26日から8月4日までおぢばで開催され、期間中、参加の子どもたちは「しこみ・ふせこみ行事」や「おたのしみ行事」を通してお互いのたすけ合いを学び、本部、詰所での楽しい一時を過ごし、終日元気な子どもたちの笑顔と歓声が響き渡った。

笠岡団(武内正美団長)では昨年同様、1千800人の帰参と全隊からの参加、また各教会での「おとまり会」の実践を目標に募集、世話をした。

(大教会関係参加者数は次号掲載)

「よろこび いっぱい! さあ ひのきしん」との、新しいテーマのもと 立教175年こどもおぢばがえりが、賑やかに開催されました。親神様の御守護を、子供達に気付かせて、喜びの心をひのき

しんに表すことを教え、身に付けさせ、更には日々の暮らしの中に生かしてもらいたい。その絶好の場となるのが、こどもおぢばがえりです。そして「しこみ、ふせこみ行事」「おたのしみ行事」を通して「三つの約束」を子供達に伝えます。

笠岡大教会からも、連日、大勢の子供達が帰参して、元気な笑顔と歓声が響きわたりました。詰所では今年も、育成係による、朝のおつとめ、ラジオ体操、目標発表などがあり、ケジメのとれた生活をおくることが出来ました。また7月28日、31日、8月2日と行事係による模擬店が開催され、夕方の楽しいひとときを過ごし、これには、中学生の「わかぎひのきしん」も参加して「よろこんでもらいたい」という思い一つにひのきしんをさせていただきました。今年も、連日猛暑続きで、さらに電力の問題から子供達の体調が大変心配されましたが、大きな事故、ケガもなく、つとめえさせて頂くことが出来ましたことに、御礼申し上げます。また期間中、大勢の方がひのきしんに当たって下さり御苦労様でした。ありがとうございました。7月、8月は「教会おとまり会強調月間」です。こどもおぢばがえり後の、丹精として、長い目で見たおたすけの大事な御用として、実施して下さいますよう、お願い致します。

(少年会笠岡団長 武内正美)

賑やかだった詰所行事

今年もおぢばに帰った子供達に本部行事だけでなく、詰所でも楽しんで貰おうと、詰所行事が行われた。例年通りの模擬店、映画上映、詰所内クイズなどに加え、今年は引率者の方にも喜んで貰える様に模擬店で生ビールを販売したが、売れ行きはもう一つだった。また、来年少考を凝らした行事を考えて行きたい。

今年のクイズの問題と解答を記載します。

▼詰所内クイズと解答

小学校低学年(幼児、小学校1・2・3年生)コース

- ① トラをたべちゃうぐるまってなあに?
(トランプ)
- ② こいでもこいでも おなじところをいったりきたりするのりものってなあに?
(プリン)
- ③ つえからよんでも したからよんでも おなじなまえのおみせ なあに?
(やおや)
- ④ おいしゃさんで うっているものって なあに?
(ちゅうしゃ)
- ⑤ さかだちすると かるくなる うみのいきも のって なあに?
(ウナギ)
- ⑥ くびは くびでも くちからくる くびって なあに?
(あび)
- ⑦ どれか一つに ついては



自然の中での講習会

第70回英語講習会

吉備青少年の家にて開催

8月6・7日

新体制の海外部員で練りあった節目の第70回英語講習会は、初めて大教会から外へ出て吉備青少年自然の家で開催された。俄に揃えたスタツポロシヤツ、毎食食べ放題のバイキング食、

自然の中での学習と英語オリエンテーション、英語を取り入れた肝試し、スキットコンテスト等新しい行事が多く組み込まれた講習会だった。ゲストは米国からレイモンド森下さん(名東部属)とサブゲストとしてケニアからT L I日本語学生のサムエルさん(米府)が参加してくれた。小、中の学生だけでなく、大人の参加もあり、それぞれ特徴がでた楽しい講習会だったという参加者達の口々の感想だった。これからも尚一層の充実した講習会になるよう、スタッフ一同喜んで楽しんで努めて行きたい。

(海外部長 上原 志郎)

英語講習会に参加して

照陽分教会 MIU(三浦和美)

今回初めての参加です。きっかけは、大教会で鼓笛の手伝いの時、「英語講習会にぜひ来て下さい。楽しいですよ。」と声をかけられた事です。子どもと参加したいと思ひ英語はすごく苦手な私ですが、参加を決意しました。

結局、我家からは私一人で不安だったけど、国立きび青少年センターに到着。大自然の中での勉強が始まりました。

英語・ゲーム・きもだめし・降ってきそうな沢山の星・流れ星・季節はずれのホタル・ゲストの先生のお話etc ドキドキ、ワクワク、ビクビク、ジーンと日頃味わえない事が沢山ありました。

ロサンゼルス出身のレイモンド先生とケニア出身のサムエル先生はとても素敵な方で、先生やスタッフの方が丁寧に教えて下さり、以前より英語に興味を持つことができました。「今からじゃ遅いという事は何も無いよ。やろうと思っただけが大事なのよ。」「英語の勉強と思うと難しいけど、相手の言葉がわかったり自分の言葉が相手に伝わると良いよね。」という言葉に私も英語で伝えたいと思うようになりました。

先生のお話からは、それぞれの母国の事や日本との違い、これから先の目標に向かって頑張っておられる様子が伝わり、「皆さんは恵まれている。感謝する事を忘れないで。」という言葉が印象的でした。

今回、講習会を通じて英語だけでなく、スタッフの方々の支えや頑張り、自然や外国の文化に触れる事、感謝する事の大切さを感じられ、参加できて良かったです。皆さんありがとうございます。

来年も行きます

大教会 松浦 杏奈

英語講習会ではしっかりと英語を学ぶことができました。

はじめは、分からないことがたくさんあったけ



スキットで英会話を楽しむ

ど、先生達やゲストの二人がすぐ分かりやすく説明してくれたからだんだん読めるところが増えました。

私は英語の塾に行っていて、そこにいった時に似たような文章の問題が出て、とけたことがすごくうれしくて、前より英語が好きになりました。講習会のおかげです。

この講習会で一番楽しかったのは、コンテストです。

みんなが練習した発表がみれたし、自分もまちがえたり、すごくきん張したけどがんばれたから一番思い出に残っています。

Bグループの一番良かった人になれなかったし、どっちでも良くて選ばれなかったって知ったときはちょっとぎんねんだったけどそこまでのいつて言ってもらえたことはうれしかったです。

英語講習会は、すごく楽しかったし来年あるか分からないけどコンテストのリベンジもしたいのでまた行こうと思います。

自然とのふれあいの中で

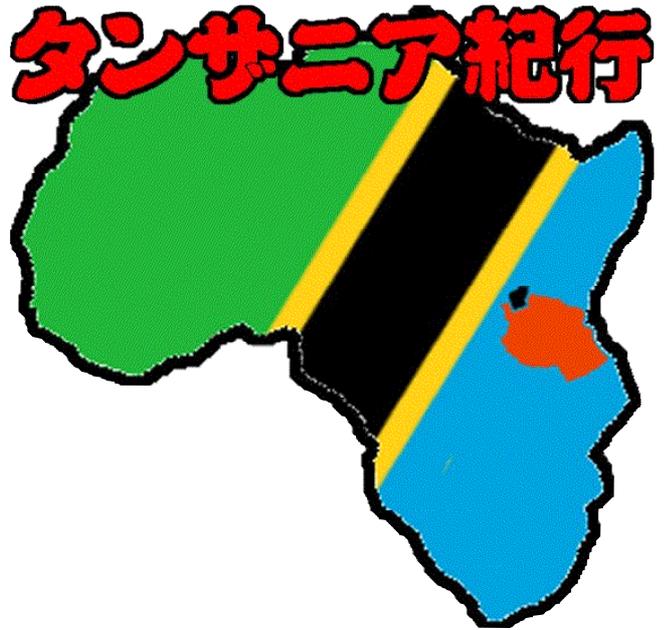
高屋分教会 武内 敬 教

この度の英語講習会は70回目ということで国立吉備青少年自然の家で行われました。子供達が英語の学習だけではなく自然とふれあうこともで



ゲストを中心した授業風景

きる素晴らしい環境でした。教会では見られない子供達の表情をみることができるようになった機会をもっと増やしてもいいと思いました。私自身としては、外部での英語講習会は今までなかったことから、経験のない自分でも話し合いなどに気負わず参加することができ、大変ありがたく感じました。



3. ダルエスサラームでの

おたすけ(前号より続く)

▼富裕層への布教・教会設置の機運

ダルエスサラームでは経済的に裕福な家庭ばかりを訪問した。どの家に招かれても、居室には大型テレビとステレオが置かれ、豪華なソファアが据えられていた。志郎先生曰く、タンザニアを訪問する度に少しずつダルエスサラームでのおたすけ先が増えており、それも会社の経営者などの富裕層を中心とした拡がりを見せている、とのことであった。その最たるは、タンザニア大統領の夫人を叔母に持つナイマ(先述した用木)のキルワ家

であった。キルワ家を訪ねるとその庭先にはヨーロッパや日本の高級自動車が大台も並べてあった。タンザニアの一般庶民には中古車一台すら到底持ちえない代物であるから、その経済力の凄さがうかがえる。この家の主であるキルワさんを見るからに徳の高そうな方で、ダルエスサラームにある複数の孤児院の支援にも精力的に携わっていた。また我々に非常に好意的で、日本人は海の幸が好物とどこかで聞いて、わざわざ自ら海に向いてダイナーの食材を釣り上げてくれたほどだ。またさらに、私たちの乗るソンゲア行き自動車が手配出来ず困っていたところ、自分の自動車を快く貸してくれた。タンザニアの道路には自動車の速度を意図的に落とさせる「バンプ」という段差が設けられており、ソンゲアへの片道90kmの道中このバンプを数多く乗り越えて進まなければならないので、自動車の損傷を免れないことは百も承知のはずなのである。このような親切の背後に何らかの意図が含まれていると考える人もいるかもしれないが、私にはキルワさんの気高く柔らかな表情からそのようなものを想像することは難しい。このように、ダルエスサラームではマユンガさんを媒介にして、タンザニアの上層階級に位置する人々との交わりが深く広く持たれるようになってきている。

キルワ家に限らずどの家庭を訪問しても手厚く

迎えて下さりとても嬉しかったのだが、それと同時におさづけも真剣に受けて下さる方の多いことに非常に感銘を受けた。マユンガさんの兄にあたるマーティンさんのお宅にも訪問したが、この方は三年前に初めて伺っておさづけをお取り次ぎした際には、体が麻痺して寝たきりの状態であったそうである。しかしこの度訪ねてみると、何と自らの足で歩いて私たちの前に姿を現してくれたのである。親神様の深い思召しと教祖の自由のお働きを実感するとともに、私は、おさづけのお取り次ぎの最中に素直に神に乞い願う彼の姿に、神に



おさづけの後で

対する純朴な姿勢を感じた。これはマーティンさんに限らず、おさづけをお取り次ぎした他のタンザニアの方々にも見受けられた。『苦しい時の神頼み』で一時的に神様にすがると多くの日本人と比べて、彼らはその日常において神様との距離がとでも近い状態にあるような気がした。大抵の事は自分の思い通りに叶うようになった現代の日本では、神に願い、神にすがるとはほとんど見受けられなくなったようである。我々信仰者の間においても、その傾向は次第に浸透しつつあることを、タンザニアに来てはつきりと気づかされた。物質文明の発展とともに失われゆくものがあることを、信仰者である我々は特に自覚しなければならぬのではなからうか。

今回の拙稿にもう一つ載せておきたいことがある。それはタンザニアの方々、天理教の施設(教会)の設置を願っていることである。ダルエスサラームに滞在中、一人の女性が志郎先生に、『Why don't you build church?』(教会を建てましょう)と繰り返し訴えていた。彼らの会話の中でこのフレーズは何度となく私の耳に飛び込んできたので、英語の不得手な私にも聞き取れるようになって



用木第一号のマユンガ氏と共に

しまったほどである。彼女は別席運び中のエディナの妹で、日本を含めて世界数カ国を見聞し、女性を支援するNGOを主宰するやりてである。彼女は、タンザニアに教会を建てれば必ず人が集まり、更に人が人を呼んで多くの人が集まる、と力説する。それに乗じてステイブ(用木)が、『俺は志郎さんに会ったときから(教会を建てようと言っている)』と彼女に加勢するのを聞きながら、妻の言葉を思い出した。未信者で教会に嫁いだ妻が初めてタンザニアを訪問して帰国したとき、彼女の

こころの詩

▼天理教道友社発行『天理時報』、「時報歌壇」より転載
▽笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されていましたので転載させて頂きます。おめでとございます。

福満分教会
7月29日付

福島悦子さん

無理すなと言いてくれしが野良仕事
無理は承知で晴れ間と競う

▼養徳社発行『陽気』誌八月号、「道柳」より転載
▽今回の課題は「満」、笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されていますので転載させて頂きます。おめでとございます。

口から、「タンザニアに行ってみて、お道の信仰初代の人達が教会設立を切に願った気持ちわかつたような気がした。」と語られた。病苦にさいなまれ、貧困にあえぐタンザニアの人々にとって、助かりを求めて寄り集う場所の設置を願う気持ちは当然のことである。

いちれつ兄弟を説くこの教えは、今まさにこの国の人々から必要とされているようである。

(芳井分教会長 佐藤真孝)

▼表紙写真 (吉岡輝昭かさおか編集部員)

佳詠 東悠分教会前会長夫人 田林美智子さん
満席の孫念願の用木に

温故知新

いきいきエピソード 16

生涯、内助の功?

コウさんの事を誌そうと思って、つい宇三郎先生の当時の身边を記し始めたなら長くなってしまう。長くなったついでに、もう少し幸男先生の文章に従って書き進めたい。

「一月に美津が死に、七月に以和が死に、九月に良一が死ぬ。そして年末になると、養父・幾太郎はべったり寝付いて食事が出来なくなつた。生来一徹なので気はつっぱっているが、衰弱はひどく、明けて一月教祖と同じ二十六日息を引き取つた。満で六十才。四十五才から天理教になって、祖先から引き継いだ財産を全部使い果たしてこの裏小屋で体一つになって最後はその体も癌で失つた。看病、葬式、看病、葬式と何度繰り返したのか、新婚・宇三郎はそのために藤井へ来たような、来たから皆が助かったとも言えるが、情ない運の悪さである。

幾太郎に死なれて最も打ちひしがれたのは、十八になったばかりの千代であった。九ツと七

ツの姪と三人だけが血縁として、孤独な存在となつてみると、千代の心は、幼い時からこま

での道のりが、美しい楽園から出て、降りる下る、そして谷の底へ底へと落ちるだけだったと思えて、涙も出ぬ程放心していた。宇三郎は養子に来て相手に死なれて、元の谷口に帰るか、藤井の家を立てるか、信仰とは何だったのか、いんねんとはどういう事なのか、迷いに迷つたろう。亀代と松代は「お父さんがいる、まだお父さんがおる」と安心していた。丸一年の親子なので、お父さんといつても遠慮があり、千代の方へ千代の腕にばかりまとわつてはいるが、一旦結ばれた縁のこれが子供かと思えば、不憫で離す気にはなれなかった。やつと春になり夏が来ようとする時、梅雨の湿気に押しひしがれたように千代が倒れた。既に病に侵されていたのか、そのまま六月十日死亡。数えの十九才、亀代と松代が、息絶えた叔母に取り縋つて離れない。哀れさに皆眼をそむけた。この千代の十八年の生涯に喜べる日はあったのか。幼児の想い出しかなかつたろう。明けて三十六年。西城の実父・最三次が弱つたと様子が来て、宇三郎は子供を上原伊助様に預けて西城へ向けて旅

立った。

幾太郎の一年祭を主に、以和、美津、千代の慰霊を済ませて二月の寒風の中を宇三郎は歩いた。井原、高山、豊松と進み、山を越え川を渡り、心の中で僅か三年の間、余りにも多かつた不幸を思い返してさてどうするか、胸の中は空虚で確たる事は何も決まらず油木から川沿いに登って、恐らく暗くなつて東城集談所に着いた。集談所の島田さん始め皆さんから慰められたが詳しくは話さず、翌日西城へ入つた。八十三才の父・最三次にどう話すか以和が死んだとは言つたろうが、詳しくは話さず長逗留を覚悟で孝養の最後だと、看護に努めた。最三次は「宇三、よう帰つた、よう帰つてきた」とその程度で、宇三郎が幸か不幸などには触れずに喜んでた。或晩夕食のあと「わしはゆくぞ、もうゆくぞ」と最三次が言うので「どこへ行くんか、この夜中に」「ゆくぞゆくぞ」こんな言葉をお互いに交わしている間にこつくりと臨終となつた。可愛く思っていた末子の宇三郎に抱かれて最三次は満足してこの世を終わった。宇三郎が来てくれるのを待っていたかのような大往生であった。その後宇三郎氏は腹を決めて笠岡の藤井の家

へ帰って来た。

笠岡周辺の布教という事で近い所を歩き、家に帰って子供の世話をし、又出て歩きという日々を過ごした。明治三十七年八月から神邊出張所の依頼で因島集談所に派遣された。大半を因島で過ごしたが、留守中に亀代が出直した。明治三十八年一月から因島の布教を三島李次氏と交替し、稲木、陶山、吉浜、長迫、今立と笠岡周辺を受け持つて信者宅を訪問しては新規の開拓に努めた。宇三郎は毎日歩きに歩いた。全ての過去を頭から消して、連日病人に助かって貰いたいと困っている人の救援にと、下駄を擦り減らして歩き歩き廻った。一日一日食べる物があつたら幸運で、天の與えだけで過ごす覚悟の天理教の布教師の日々は、生きている以上に困難を極めていた。

近所の人達や上原家の人は、宇三郎と松代の生活を心配していた。宇三郎が又西城へ帰ってしまうかもしれないから、嫁に来てくれる者を探して、藤井の家が立ち直るようにしてやらねばこのままでは見ておれないと話し合われた。

岡山支教会の部内の後月集談所の役員の棗田さんのところに、少し年の過ぎた娘が居ると、

人から人に話があつて、浅野弥三郎さんが尋ねて行かれた。当主・棗田菊太郎は左官を業とし、長男・佐平次、次男・丈二郎を連れて、仕事に励んでおり、妻のクラは縫物をよくし、客からの頼まれものに忙しく傍ら集談所の手伝いをしてゐる。娘もコウは学校より縫物が好きだと幼い時から針を持ち、母に仕込まれて早くから一人前になり、この頃では仕立物はコウが主にやっていた。

明治三十八年五月、コウさんは吉井から笠岡の藤井家へ入嫁した。媒酌人は浅野弥三郎夫妻であつた。コウさん二十五才、宇三郎さん三十九才だつた。明治四十年、支教会承事を拝命、同時に第三号地区(陽備分教会前身)の担任となつた。宇三郎さんは虫明元三郎氏宅へ、ときには泊まり掛けで丹精に次ぐ丹精を重ねた。結果、明治四十四年十月陽備宣教師所が設立され、初代所長に就任された。

その後陽備の上に心尽くし、新しい信者を増やし、教会の内容充実に力を入れた。大正八年、陽備の会長を辞任した。二代会長は虫明銀治郎氏であつた。その後、宇三郎氏は九州・若松に布教に出たが、大正十年五月、笠岡へ帰った。

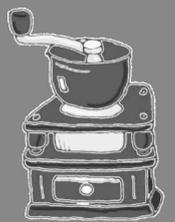
笠岡町内の信者の修理丹精に努めた。瀬戸之町の坂の道がちびたと言われる程、宇三郎氏は熱心に信者の丹精に努めた。大正十四年五月宇三郎氏は分教会理事を拝命した。昭和十五年二月、七十五歳で出直すまで、コウさんと共に過ごされた事を思う時、人の一生は、その人の心の一つの事を貫くものがあらねばと思う。二人の連れ添いに先立たれた後、コウさんと結婚して後にも近親に出直しが多かつた中で、先生は笠岡の道の中で、心倒さず歩まれた。そういう人の歩みに支えられて、今の私達の道がある事を忘れてはならないと思う。

コウさんの内助を書こうと思ひながら、何も書けなかつた。ただ、コウさんが藤井家に来られて、宇三郎先生の信仰に輝きが出てきたと私は思う。それこそ内助ではなかつたかなと感じる。

藤井憲男先生が身上の時、笠岡駅の便所掃除を毎朝やつておられた事。長い間、大教会教祖殿の掃除当番を務めておられた事。作つて下さったひしおの味噌がおいしかった事。いろいろあるが割愛する。

(大教会理事)

談話室



今こそ陽気ぐらしになれる時

大教会 谷本光司

僕が石巻に来させてもらって、半年になります。今、僕たちが何をさせてもらっているのかと言うと、仕事は、震災瓦礫の受け入れ施設の建設です。「ガレキ」を「チップ」にしたり、燃やしたり、10数社のJVです(※註参照)。最大手です。それだけ復旧に力を入れていると言う事です。

6月中旬から瓦礫の処分が始まりました。来た1月の末ごろは、右を見ても左を見ても瓦礫の山でした。3〜5年で片付くそうですが、到底無理だと思います。まだ、すごいたくさんの瓦礫があるので、どう考えても無理だと思います。

僕は、「いわき」に行かせていただいて、少しは、気持ちがわかるように思っていました。大変だと思っていました。

石巻の人々の「たいへん」さは、また違うような気がします。石巻の人々の「大変」さが痛切にわかります。

僕が何を言いたいかと言うと、
おやさまの思いはどこに有るか
と言うところです。

石巻の震災瓦礫を北九州に受け入れてもらう事になっていても、一部の人々がストライキまでして大反対をした事です。情けないなあと思つてTVを見ました。



2012/05/12

おやさまは、陽気ぐらしにしてやろうと仰っているのに、全然、陽気ぐらしにならないと言う事です。

僕は「いわき」に行かせていただいて震災瓦礫の片付けのひのきしんをさせていただいて、人は口ではいい事を言つても、口と心が全然違う所です。

おやさまはこの事を言つておられるのじゃあないかと思ひます。

心だけが我がの理とおっしゃっているように、今こそ本当に陽気ぐらしになれるんじゃないかと思ひます。

又、おやさまは、「世界ろつくの地」と言われているように、このような事をしてたら、「まったくいら」何もなくなつて、どろろみこ、うきのように、何もなくなつてしまうような気がします。

今から、ほんとうに「一人一人」が気持ちかわるようになつておっしゃっているんじゃないかと思ひます。

僕からでも、少しでも石巻のために役に立っていきたいと思ひます。自分なりに、精いっぱい頑張らせていただこうと思ひます。みんなが少しでも陽気ぐらしになれるよう頑張らせていただきます。



編者註)JV: joint venture の略。共同企業体。

複数の異なる企業等が共同で事業を行う組織のこと。主として土木建築業界において、一つの工事を施工する際に複数の企業が共同で工事を受注し施工するための組織のことを指す。民法上の組合に該当するとされる。

石巻市では、東日本大震災により大きな被害を受けた同市の復旧・復興を図るため、

同市内の地元建設業者が、市外の建設業者と共同し、その施工能力を強化して復旧・復興工事を円滑に施工できるように、復旧・復興建設工事共同企業体(復興JV)制度を創設している。

悲しみをのり越えて

芦品分教会 金谷 眞佐代

私の弟は七月十五日(日)に五十五才の若さで出直しました。

末期の肝臓ガンでした。親孝心ひとすじの布教所長が、なぜ?と思いましたが親神様の深い親心を、はたはたの者が、悟らせて頂き、この大節を生き節としてすばらしい芽を出させて頂きたいと思います。

今年1月より身上がすぐれませんでした。弟は私に「ばあさん(母)の介護をしてくれよ」と言いました。「介護って何をしたらええの、私にできるかしら?」と言ったら「ばあさんのとなりに夜寝るだけでええんよ」と答えてくれました。「そんなことならお安い御用よ」と、今でもずっと夜はふとんを並べて、休ませて頂いています。

弟は身上がわかった時、55年間、最高の人生を送らせてもらったんだから笑顔で送ってくれよとお嫁さんに言ったそうです。写真をとるのが、あまり好きでなかった弟ですが、入院中はおたすけ

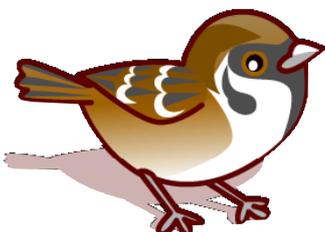
に来て下さる方、お見舞いに来て下さる方、みんなといっしょにアイ、パット?という写真をとっていました。弟の笑顔はそれはそれは輝いていました。

出直すまで半年間ありました。お嫁さん、五人の子供たちに、言っておきたいことを言っていました。また子供達には、親孝行な子供に育ってくれて本当に嬉しいよと言っていました。出直す前に母より先にいってしまうので「最後に親不孝したな」とも言っていました。また、自分はおたすけをしていないとも言っていました。五人の子供達がようぼくになったということは、何よりも大きなおたすけだと私は思っています。

告別式の日、高屋の会長様から弔辞を読んで頂きました。すばらしい内容でした。弟もきつと、喜んでいると思えました。私にとっては、兄のような最高の弟でした。

これからは布教所長となった弟のお嫁さんに心をあわせ、低い心で、陽気に勇んで日々を通らせて頂きたいと思えます。

弟もきつと、私達のそばで、見守っていてくれると信じています。55年間、ほんとうにありがとうございます。



全国大会出場で市長から激励

全日本ドッジボール選手権大会

— 海松ヶ岡分・森本善修君 —

笠岡市立笠岡小学校5年生の森本善修君(11歳・海松ヶ岡分教会長、森本忠善さんの三男)は8月9日、笠岡市役所市長室で行われた笠岡文化・スポーツ振興財団(理事長・三島紀元市長)主催の野球やドッジボールなど国際、全国大会に出場する郷土選手激励会に招待された。

この日出席したのは第22回全日本ドッジボール選手権に出場する森本君、原田琉聖君(中央小学校6年)、三宅志門君(大井小学校5年)ら3人をはじめ、東アジア野球大会(1人)、第39回全国中学生テニス選手権大会(1人)、第17回全日本レディーズソフトボール大会(1人)の6人。

三島市長が「練習の成果を発揮して実りの大きい大会にして下さい」と激励。森岡聰子笠岡市議会議長もあいさつ。一人ずつにスポーツ賞揚金を贈呈した。

出席者の紹介のあと、森本君は「県予選で悔しい思いをした他のチームの思いを背負って、精一杯戦いたい。出場出来るのは指導して下さい方をはじめ、保護者の支えがあり、感謝の気持ちを忘れず頑張ります」と全国大会への決意を話した。

森本君の所属する里庄レッドスネークス(山近克彦監督、平成22年発足)は7月29日、岡山県内25チーム、約600人が参加して行われた県大会で優勝、全国への切符を手にした。全国大会は8月12日、大阪市此花区「舞洲アリーナ」を会場に行われチームメイト12人と共に、全国の予選を勝ち抜いた48チームと優勝を争う。予選リーグでは香川県代表の普通寺クラブと当たる。

森本君は小学4年生の時、学校の先生の勧めでドッジボールと出会った。練習はキャッチボールなどの基本をはじめ、実戦練習など監督の指示のもと平日は午後7時から同9時。土、日は午前9時から午後4時まで行われる。持ち前の負けん気で毎日、休むことなく自宅から練習会場の里庄小学校まで通う。弟の陽気君(小学校4年生・四男)も兄と同じチームに所属して頑張っている。

「しんどい時もある。しかしチーム皆でプレーし、皆で喜び、皆で戦えるのがいい。止めようと思ったことは無い」とドッジボールの魅力を話す。

同チームは発足2年目の今年6月3日、広島県内で行われたドラゴンカップ・西日本大会で優勝するなど活躍が目覚ましい。

「まず予選を突破すること。教えてもらったことを着実にする。これをしたから勝ったという理由がある試合を皆でしたい。目標は勿論、全国制覇」力強い言葉が返ってきた。

(8月11日記。試合結果などについては9月号掲載予定)



市長から激励される選手たち(右から2人目が森本善修君)

全教会長の参加を！

立教175年 全教一斉にをいがけデー

提唱80周年

9月28日～30日「よふぼく実動日」
28日「教会長路傍講演の日」

「全教一斉にをいがけデー」が9月28日(金)から30日(日)まで全国で実施される。

これは一年に一度、地域に住むお互いが力を合わせ、一手一つに心を揃えて親神様の神名、お道のにをいを広めていこうというもので、普段は個々で布教していても、この時は揃って勢いをもって全教が一斉に行動し、更なる布教活動の実をご守護いただくとの思いから期日を定めて実施されるもの。

28日から30日までの3日間は支部を中心によふぼく、信者が「よふぼく実動日」としてにをいがけ活動を展開し、28日は「教会長路傍講演の日」として全教会長の参加を目指して行われる。

全教一斉にをいがけデーは、教祖50年祭、立教100年祭に向かう両年祭活動最中の昭和7年8月18日、天理教青年会、天理教婦人会の提唱で実施された「全国一斉路傍講演デー」として始まり、今年で80年を迎える。

また「教会長路傍講演の日」は6年目。全教会長が布教活動の先頭になり街角に立ち、親神様の教えを伝え、にをいがけの実動の推進役になってもらいたいとの思いが込められている。

更に9月の1か月間を「にをいがけ強調の月」と定め、この月はそれぞれの教会につながるよふぼく、信者はもとより休日や夜の時間帯などを活用して働くよふぼくや学生にも積極的に参加を呼びかけ、次代の育成と共に、地域での継続的な布教活動につなげる工夫をもっての丹精が必要となる。

笠岡大教会では、教祖130年祭に向かって「おつとめ奉仕人の増員」を成人目標としている。日々の布教活動を通して目標達成に向けつとめたい。

全教一斉にをいがけ事務局(本部布教部にをいがけ課内)では9月28日から30日までの期間中は記念祭、奉告祭、年祭などの教会行事の自粛を呼びかけている。(この記事の一部は同事務局発行『担当者用実施要項』の中から許可を受けて使用しています)

<会計部>

○大教会長様の署名・捺印について

・必要な場合は事前に大教会に連絡して下さい。

<布教部>

○教会長特別講習会について

参加者の送迎を大教会でします。希望者は布教部長・田中まで連絡して下さい。

七月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます

親神天理王命の御前に 会長上原理一慎んで申し上げます

親神様には「せかいちううハみなわが子カハいい、ばいこれが一ちよ」との親心のままに春・夏・秋・冬と四季折々の恵みを通して陽気ぐらしの一端を味わわせて下さっております事は誠に有難く勿体ない極みでございます。今は梅雨も明けて夏真っ盛りの中であり暑さを楽しませて頂いておりますが年々温暖化が進みその内暑さも楽しむどころではなくなる恐れがあります。そうならないことを願って私共は日々朝夕に御礼申し上げると共にご恩報じを念じつつ一人でも多くの人々に親神様の御守護によつて生かされている事と全て私達の心通りの守護である真実を伝えさせて頂くべくたすけ一条御用の上に勤め励まして頂いております。

その中にも今日の吉日は月に一度の御祭日でございますので、只今からおつとめ奉仕人一同一手一つの心で明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて七月の月次祭を執り行わせて頂きます。

御前には暑さ厳しき中も厭いませず今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供達が相共にお歌を唱和し、日頃の御高恩に改めて御礼申し上げる真実の状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。

さて本日は世話人の島村廣義先生にお越し頂いております教祖百三十年祭に向けての御諭達発布を三ヶ月後に控えたこの旬に当たつてのおちばの声をしっかりと聞かせて頂き目標を見据えて成人の歩みをさせて頂く所存でございます。又目前にせまったこともおちばがえりの募集に余念はございません。一人でも多くの子供に親の息を掛けて頂くと共に事故怪我等のないようお連れ通りの程をお願い申し上げます。更には又八月には学生生徒修養会・英語講習会・サマーキャンプそして教会おとまり会等と子供を対象とした行事を通じて道の後継者の育成に力を注いでいく所存でございます。

何卒親神様には世の風潮に流されることなく親孝心一筋に御恩報じの道を歩む皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして願う心の誠の理に尚も自由の御守護を賜り生かされている喜びを一人でも多くの人に味わって頂いて御恩報じを願う人々が弥増してお望み下さる陽気づくめの世の状に一日も早く立て替わりますようお願いの程を一同と共に慎んでお願い申し上げます。

・原・稿・募・集・

内 容

①小随筆 ②教会・布教所の独自の活動の紹介 ③俳句・和歌・川柳 ④教会行事開催後の報告記事等々

字 数

1000字前後(800字~1200字) 題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。俳句等は一句からでも結構です。

寄稿先

下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。

郵便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江377

FAX：0865-66-1314

メール：tenkasa@yahoo.co.jp

尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。



大教会だより

◎教会所在地の変更

ひろさと分教会

〒七三二-〇八一八

広島県広島市南区段原日出

一丁目五番十八号

電話…なし

◎本部食堂ひのきしん

自 立教175年7月16日

至 立教175年7月31日

甲井 山田 要

◎子どもおどげがえり

詰所受入ひのきしん

前半 自 立教175年7月26日

至 立教175年7月30日

東 中島 順子

東 中島 洋子

西 横山 逸郎

福山 藤原 鈴江

高屋 栗原 興子

島根 雑賀 元生

上・府 小西 紀惠

後半 自 立教175年7月30日

至 立教175年8月4日

東 徳山 毅

西 小坂 義孝

福山 宮本 正明

高屋 藤井 宏一

島根 三代 麗子

上・府 山田 信子

有志 島根 面谷 美恵子

瑞雲 豊田 俊美

甲井 山田 敏教



二十四節気では、もうじき「処暑」を迎えます。暑さが終わり、朝夕に涼しい風が吹く気持ちの良い季節だということですが、まだまだ暑い日が続きますね。遅ればせながら、残暑お見舞い申し上げます。

さて、先日ある研修会に参加するため車で出かけました。その日は余裕を持って出たつもりなのに交通渋

滞に巻き込まれて遅れそうになりました。時間を気にしながら渋滞を抜け「やれやれなんとか間に合いそうだ」と安心して進んでいた時、ある交差点で右折の矢印が出ているのに発進しない車がいるのです。数台前なのでクラクションを鳴らすわけにもいかず、イライラは頂点に達しました。

次の青信号で右折してその車を見ると、高齢の方が運転されていました。腹を立て、毒づきながら追い越そうとしたそのとき「もし父が生きていて、あの車を運転していたら」という考えが浮かびました。それから私の部屋にかけてある額の言葉を思い出しました。

「子供叱るな来た道だもの、年寄り笑うな行く道だもの、来た道行く道二人旅、これから通る今日の道、通り直しのできぬ道」

この言葉は作者がわからず、ただ妙好人とだけ記されています。妙好人とは浄土教の篤信者、特に浄土真宗の在俗の篤信者を指す語だそう、永六輔氏が著作『大往生』の中で引用され有名になったものです。毎日見て座右の銘としていられるも関わらず、いざとなるとなかなか実行できませぬ。

反省、反省。

(V)

